

令和4年8月3日

# 南の風 453

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号で、コーチは成功体験にすぎやすくなる、という話をしました。

例えば、前年に成功を収めた戦術が今年上手く行かなかった場合があったとします。コーチは、「去年上手く行ったのだから、俺のやり方は間違っていない。悪いのは自分ではなく選手たちだ。」という思考になりがちです。

繰り返しますが、経験から得られることはとても貴重です。しかし、勝ったり成功したりしたときの経験から得られるものは、抜け落ちていることもたくさんあることも知っておく必要があります。

『成功は次なる成功をまったく保証しない』のです。

成功した要因というのは、我々が思っているほど単純ではないのです。成功の要因が経験から学べるというのは、半分あっていて半分は間違っていると思います。

経験から学ぶべきことは、再現性（同一の結果が同一の手法によって得られるとき、それらの結果の一致の度合いの高さ）のあることです。

ここでいう再現性とはある年度のチームが、何度も何度も繰り返して練習したプレーやスキルを、ゲームの中で体現するということです。

年度が替わり、自チームの構成メンバーも相手の選手も替わった場合、前年度と同じやり方では、再現性がある成功体験というものはほとんどありえないのです。

課題克服のために、毎回ある練習を続けたとします。一か月後にどういう成果が出るかは想像できます。しかしある大会の優勝チームを見て、こんなことができている、それはこういう練習をしたからだとして断定するのはとても難しいことです。（今、目の前にある状況から、過去を言い当てることをリバースエンジニアリングという）

可能性はいくらでも思いつきますが、それが正解かどうかはほとんどブラックボックスのようなもので、証明することはできません。もしかしたら元々できる選手が集まっただけかもしれないのです。

具体的に例を挙げます。ターンオーバーが多いチームがあるとします。ターンオーバーの原因を分析し、パスミスの多さだと分かりました。それなら、実戦的なパス練習（ディフェンスを付けた、ミートやシールしてのボールのもらい方や、パスの出し所をカットされない出し方など）に取り組めばターンオーバーは減っていくはずですが。

しかしターンオーバーが少ないチームを見て、そのチームがやっている練習をそのままやっても改善するとは限りません。

ターンオーバーが少ない要因は、チーム練習以外の個人練習によるものや個人の資質かもしれないのです。単に強豪校がやっている練習を真似ただけでは、問題は解決されないのです。

リバースエンジニアリングに頼りすぎずに、効果的な練習を作っていくためには、ゲームを分析して自チームの課題を抽出し、それに対する改善を繰り返すような試行錯誤がお奨めです。そうして具体的に練習メニューを改良していくことが、指導者としての学びを深めることになると思います。